第18回水質汚濁学会

本年3月26日から28日にかけて、第18回水質汚濁学会が東海大学代々木校舎において開催されました。本特集では本学会のハイライトを、一部の座長の方々のコメントを加えてお送りいたします。学会を当日だけの質疑応答や意見の交換に終わらせてしまうことなく、有意義な研究発表について広く、会員の皆様方の間の議論、発展につなげていくことが重要と考え、この企画を試みました。(担当 茂庭竹生*, 国包章一**)

総括報告

久保田 宏

学会は3月26日から29日までの3日間、昨年と同じく東海大学代々木校舎で行われた。年度末も押し迫った忙しい時期に、しかも東北大学で開催された日本薬学会と日程が一部重なるなどで参加者が減るのではないかと心配したが、幸い表1に示すように、参加者は総計561名に達し、昨年より約30名減にとどまったのはとにかく嬉しかった。現在、国内及び国際個人会員1124名、公益会員87団体(2月29日現在)の学会であることを考えると、500名を超える学会出席者数は、十分誇るに足る数字で、当水質汚濁研究協会が非常に熱心な会員の多い活動的な学会であると自負してよいのではなかろうか。

表1 第18回学会参加者数

所 属	会 員	非 会 員
大 学	80	11
国立研究機関	22	9
地方公共団体	177	156
民 間	59	15
学 生	10	0
外国人	1	2
その他	13	6
小 計	362	199
総 計	561

Hiroshi Kubota
昭和25年北海道大学工学部応用化学科卒。29年東京工業大学助手。34年同助教授。49年同教授。工学博士

発表講演は本年から、昨年までのA講演(15分)、B講演(30分)の区別をなくして、全ての講演を質疑応答を含め15分間とした。また2月20日までに事前申し込みをすませた方々には、講演集を送付して、予め勉強してきていただけるように便宜をはかるという試みも行った。学会の事務局に大きな負担を強いることになったこの方法が、果たしてどれだけの効果があったのか、また学会参加者を増やすために果たして有効であったかどうか、今後検討する余地は十分あるにしても、各会場で非常に熱心な討論が行われたことは事実で、しばしば座長の先生方が討論の打ち切りを宣して

* Takeo Moniwa, 東海大学工学部

** Shohichi Kunikane, 国立公衆衛生院

次の講演に進まなければならないほどであった。それにしても質疑応答を含めて15分間という持ち時間は少なすぎる。発表時間は従来通り、12～13分程度としても、せめて討論時間を7、8分として、合計20分間にしたいものだと考えながら各発表者の講演を聞いていた。

各会場とも、ほぼ常時満席に近い状態で、時には会場の後ろに追加した補助椅子にも座りきれない人が大勢立ったまま講演を聞くという状態であったが、会場の後部からでは、スライドが小さくて見えにくく、参加された方々にご迷惑をおかけしたことを、この紙面を借りてお詫びします。次年度以降、会場数を増やすことが反省会でも検討された。

部屋に入りきれないほど多数の参加者を集めた研究発表会場

講演時間の関係で、十分な討論ができなかった発表者と質問者の間の討論の場として、また学会会場で久しぶりに会った友人との交歓の場として、参加者控え室を設けるべきとの意見も出ている。ここでコーヒーやお茶のサービスができれば、もっとゆとりのある学会の雰囲気をつくり出すことができるであろう。

学会会場に併設された第5回水質計測・水処理施設展の会場の一隅に、今回コーヒーとお茶のサービスを行うコーナーを設けることを試みた。座る場所まで設けるスペースはなかったが、コーヒーを片手に展示された機器等をゆっくり見ていただくとの趣旨であった。お茶は無料としたが、インスタントコーヒーの1杯50円は、高いと感じられたか安いと感じられたか不明であるが、3日間で有料コーヒーの売り上げが約700杯分あった。原料と紙コップの代金、サービス係のアルバイト賃を差し引くと、採算割れにはなったが、施設展に展示品を出された各社の皆様には喜んでいただけた。

2日目の午後は総会に続いて学会賞を受賞された岡

「農学開発と環境問題」の演題で特別講演をなされた木村学而氏

田光正氏および深瀬哲朗氏による記念講演に引き続き、木村学而氏による特別講演が行われた。これらのご講演の内容については、本誌に掲載されているので参照していただきたい。

どこの学会でも同じと思うが、総会時の定足数の確保には頭を痛めているようだが、本学会でも例外ではなかった。朝のうちの冷雨も昼前には上がって薄日がさしてきて、3月末ともなれば、例年になく遅れていた春の気配も感じられるようになり、参加者の足も自然と戸外の方に向いたのであろう。しかし、学会にとって年に一度の総会は、どうしても成立させなければならないのですから、今後会員の皆様には是非総会にも出席していただくようお願いします。ご都合で、どうしても出席いただけない場合には、「委任状」を事前には是非提出して下さい。

総会が終わりに近づく頃には、記念講演と特別講演を聞かれるための参加者が次第に数を増し、会場に当てられた500席を超える広い講堂も8割方埋まるほどであった。

懇親会の参加者数は今一つであったが、和やかな雰囲気で行われた

当日 5 時半から大学の食堂で懇親会が、東海大学茂庭先生の司会で行われた。会費も 3,000 円と安いと思うのだが、例年通り(?)参加者が少なく、今年も 50 名にとどまった。もう少し多数の参加者の文字通り懇親の場を、どのようにしたらつくることができるのであろうか。一般会員の方々には、懇親会は、偉い先生ばかりいて、何か親しみがないという先入感があるのではないだろうか。アルコールで舌を滑らかにして、講演会場では聞けなかった裏話も混じえた討論の続きを行うもよし、久しぶりに学生時代の恩師や先輩・後輩とよもやま話をされるのもよし、また名刺を交換して新しい友人知己をつくるためにも、懇親会には是非多数参加していただきたいものだと思う。またそのような雰囲気のある懇親会をつくるための何かよい案やご意見があったら是非知らせて下さい。

3 日目の午後は GC-MS 研究会および生物膜研究会の主催する研究討論会が開催された。本誌にも紹介されているように、それぞれ実りの多い討論会であった。しかしながら、学会開催の準備・運営に当たってきた私どもにとって、この討論会のあり方には多少ひっかかるものがあることは否定できなかった。例えば、学会の中での 1 つのセッションとしての討論会である以上、この学会の参加者のみがこの討論会に加わることができるはずである。しかし実際には、この討論会のみに参加することを目的として見えたかなりの方々が、参加登録もせずに入室しておられた。けちなことを言うようで申し訳ないが、良心的に参加登録をしている方々との間に不公平が生じてしまったことは気がかりであった。

来年の第 19 回水質汚濁学会は東京水産大学で行われる予定である。本年の経験を踏まえて、より充実した学会が開かれるために、反省会の席で問題となった点を上に記した事項を含めて以下に整理しておく。

- 1) 開催日時の選定：会場での制約条件の範囲内で、より多くの会員に最も都合のよい日の選定。
- 2) 予約登録と講演集の学会前送付の可否：当学会の事務能力では、今年行ったこの方法を来年も続けるには大変な努力が必要であるが、その犠牲をはらってでもこの方法を継続するメリットがあるかどうか。
- 3) 講演会場の数と発表時間の検討
- 4) 委員会主催の討論会のあり方：企画・運営に対する今までのやり方に対する再検討が必要なのでは？
- 5) 特別講演の数と演題の分野に対する検討。
- 6) 懇親会参加者増加のための具体案の検討。

以上の諸点、および他に気のつかれたことについて、私宛てあるいは学会事務局宛てに、ご意見をお寄せいただければ幸いです。

今回の学会は、昨年同様東海大学のご好意により、無償で会場を使用させていただいたのみならず、会場の設営、運営から後始末まで徳平先生、茂庭先生はじめ東海大学の方々の全面的なご奉仕をいただいた。とてもこの紙面では感謝の気持ちを表し尽くせないほどです。ありがとうございました。また会場係として、ご奉仕いただいた各大学および国公立研究所の方々にも厚く御礼申し上げます。